

## 「2014 震災・核被災に向き合う青年・学生の集い」

**日程 8月20日（水）～22日（金）**

**20日 13:30 受付** [福島県青少年会館 福島市黒岩字田部屋]

- ・セレモニー 14:00～14:50  
 歓迎あいさつ（福島・斎藤）、舞踊（セミパラチンスク・シャリアット）  
 映画「種まきうさぎ」のダイジェスト版上映、「種まきうさぎ」朗読
- ・シンポジウム 15:00～17:00「核被災の今とこれから  
 —ヒロシマ・マーシャル・セミパラチンスク・フクシマを結んで—」  
 ＊特別報告—高校生災害復興支援ボランティア派遣隊（広島）
- ・交流会 18:30～21:00  
 各県報告青年・学生、文化交流会（うたごえサポート・管幹雄）—出し物歓迎

**21日 フィールドワーク 8:00 出発—貸切バス1台（福島市～国道115号経由～）**

- 津波被災実態調査 ・漁業 相馬市松川浦 お話：石橋正裕さん他
- ・農業 相馬郡新地町 お話：三浦広志さん他

昼食 12:30～「野馬土」

仮設住宅訪問（高校生） 13:30～16:00 南相馬市鹿島区

津波・原発被災調査 13:30～16:00 南相馬市小高区 案内：今野由喜さん

交流会 19:30～22:00—友達・ネットワークづくり

**22日 分科会 8:30～11:00** A班：高校生・学生—被災地で学んだこと、これから各地でできる福島との交流・ボランティア活動など

B班：社会人—被災実態と結ぶ平和教育の課題を討論

閉会集会 12:00～ 「被災地と全国をどうつないでいくか」各県代表感想報告 写真撮影

21日のフィールドワークでは、当日、放射線測定機で調査し、一部コース変更になることもあります。基本的に放射線防護処置（各自、傘、マスク・長そで・長ズボン・帽子を持参・着用など）をします。滞在時間は約7時間ですが、少しでも余分な体内被ばくを避けるために、昼食・夕食前の手洗い・うがい、靴・衣類の土・埃の除去などをします。

### <参加者>

	参加人数	社会人	高校生	大学生	青年
広島県	14	5	6	3	
山口県	3	1	2		
東京都	3	2	1		
埼玉県	4	2	1		1
静岡県	10	3	4	2	1
高知県	5	3	2		
福島県	17	2	3	12	
その他	8	8			
合計	64	26	19	17	2

### 主催

「2014 震災・核被災に向き合う  
 青年・学生の集い」実行委員会  
 協力

平和・国際教育研究会

平和・人権・民主主義を考え  
 る全国高校生集会

協賛「トヨタ財団共同研究  
 福島発世代を超えた被ばく体験  
 のアーカイブス化とネットワー  
 ク調査研究」

## 8月20日 福島県青少年会館にて 開会挨拶

### 斎藤 毅(福島)

福島へようこそおいでくださいました。こんなにたくさんの方が福島に来てくれて本当にうれしく思います。中身の濃い集いになるとと思います。活発な交流を行ってください。



## オープニングセレモニー

セミパラチンスクから広島への留学生、シャリアットさんの「馬の踊り」（結婚式での祝賀の踊り）



## 映画「種まきうさぎ」ダイジェスト版の上映



## 「種まきうさぎ」朗読

### ○根津 咲希 (大学生)

私が生まれ、育った土地、福島。果物が美味しくて、自然が豊かなかけがえのない私のふるさと。



あの事故があってから、変わってしまったことが沢山ある。道端や学校などの施設では、除染作業が行われるようになった。テレビでは毎日現在の放射線量を放送するようになった。食べ物の放射線量を調べる場所が沢山増えた。人々の間には原発や事故後の福島に住むことに関しての考え方の違いによる溝が生まれてしまった。事故前は「非日常」であったことが、いつのまにか「日常」へと変わっていた。しかし、福島が危険だと実感できる瞬間もなく、自分が何をできるわけもなく、ただただ毎日が過ぎていた。

私には、事故後も事故前と何ら変わりのないように過ごすことしかできなかった。ご飯を食べ、学校へ行き、お風呂に入り...あっという間に過ぎる毎日の中で、確実に原発について考える頻度は少なくなっていた。普段通りに暮らしている自分の日常の中で、時折どきりとさせられる"除染作業中"の文字に「ああ、変わってしまったんだ」と思い知らされる。そしてまた、私は日常へと戻っていく。そんな毎日であった。

## ○矢葺 優佳（大学生）

福島を離れてからは、あまり空気中から放射線を吸い込むということは考えなくなった。しかし、3年が経った今でも、食べ物や水道水を飲む時は放射線のことを毎回気にしている。福島原発事故は、永遠に終わることのない悲劇である。福島県民への放射線被ばく調査である甲状腺の検査は、ここ1、2年になってようやく本格的に始まった。

2011年3月11日に起きた東日本大震災は今もなお続いている。福島県民である私たちは、この震災を忘れてはいけないうし、これから大人になっていく子どもたちにも伝えていかなければいけないものだと思う。放射線は、一度放出してしまえば完全にゼロになることはない。何十年か経過すれば、半分になり、やがて限りなくゼロに近づいていく。しかし、それまでとてつもなく長い時間がかかる。私たちと同じような苦しみを、私たちの子孫が味わうことになる。

私たちの先祖が原子力を利用し始め、生活が楽になったことは事実である。しかし、その原子力によって、今私たちが苦難を強いられていることも事実なのだ。原子力発電事故によって、放射線は危険だということを身を以って体験した。甲状腺がんや白血病への関係性はまだ明らかになっていないが、その関係性が明らかになるのは、何十年も先のことだ。3年経過した今、何も症状は表れていないが、日々放射線が蓄積している。放射線は、被ばくした本人だけでなく、赤ちゃん等子孫にまで影響を及ぼす。

今まで原発に頼っていたエネルギーは、とても大きなものである。原発をすぐにゼロにし、自然エネルギーにするのは難しいかもしれない。しかし、同じ悲劇を繰り返さないよう、将来のために原発をなくすべきである。これまで私たちが活動を通してお会いした方々は、私たちの声に耳を傾けて、共感して下さった。そのように、たくさんの方の支え、応援があって私たちが活動できている。たくさんの方々に感謝の気持ちでいっぱいである。



## シンポジウム

「核被災の今とこれから—ヒロシマ・マーシャル・セミパラチンスク・フクシマを結んで—」

司会 山下正寿（高知） 皆さんが各地から自発的に参加してくれました。本当に自発的な研究学習会だと思います。一つのテーマは核被災です。福島は今、大変な状況にあります。それぞれの県の取り組みを通じて、核被災がどのように結びついているかを学んでいきましょう。



パネリスト発言（詳細は8ページからの原稿を参照下さい）

### ○二上真衣（広島・大学生）

広島もまだ終わっていない、終われないと感じた。高校1年の時から4回セミパラチンスク（セメイ）を視察し、奇形児のホルマリン漬けに衝撃をうけた。両親はどう思ったのだろうと想像すると胸が痛んだ。カザフスタンの学生と交流し、お好み焼きなどを一緒に食べる機会をもち、核実験場の影響、奇形、障害について調べ始めた。カザフスタンでは、50歳60歳まで生きると長生きと言われる。健康そうに見えても入院したり、眼が悪くなったり、どこかしら具合の悪い人ばかりのような気がした。三世、四世へも影響している様子。1949年から1989年の40



年間に合計 456 回の核実験に使用され、1991 年 8 月 29 日に閉鎖されたが、まだ終わっていないと感じた。

カザフスタンの学生たちと原発増設はありかなしか議論した。カザフスタンでは先進国の仲間入りのために増設しようとする意見もある。しかし、管理するためのノウハウや能力があるのかどうかの問題だ。地震地帯であるし。その原発技術を日本が輸出しようとしている。日本は、核の被害者であるとともに、加害者になろうとしている。多少不便でも、世界の人が幸せに暮らせる世界にしたい。まず知ることから始めたい。

### ○ボラトワ・シャリアット (カザフスタン 16 歳)

広島で被爆した 3 人の在日韓国人のおじいさんや、おばあさんの話を聞いた。ヤケドに薬を塗るのが痛かったとか、韓国に戻ってからも何度も病気になったという話を聞いた。

私は医者になりたいと思っている。カザフスタンでは、1949 年から 89 年までの 40 年間に 450 回以上の核実験が行われ、190 万人が被曝した。1991 年に核実験場は閉鎖されたが、いまでも被害は続いている。頭が二つある子ども、眼が一つしかない子どもたち、子どもを産めない女性が増えている。医学大学に行って、そんな子どもたちを救いたい。3.11 福島原発事故についても勉強したいと思っている。「ザマナイ」という曲を聞いてください。



1. 健やかな子らは なぜ消えた  
風になびく髪は なぜ消えた  
心ないしうちよ ザマナイ  
ザマナイ ザマナイ  
清き故郷はなぜ消えた

\* 哀れなるわが大地

数え切れぬ 爆発 閃光に  
引き裂かれたわが心よ

2. 父祖の眠る地を壊して  
豊かな大地を汚して  
罰として苦しみ続けよと?  
ザマナイ ザマナイ  
ひとの誇りよ 今いずこ

\* 繰り返し

3. 泉に毒を流すものよ  
愛しき子らを奪うものよ  
何故ふるさとを貶めるのか  
ザマナイ ザマナイ  
恥じてこの身が地に埋まる

哀れなるわが大地  
数え切れぬ 爆発 閃光に  
引き裂かれたわが心よ

哀れなるわが大地  
数え切れぬ 爆発 閃光に  
引き裂かれたわがふるさとよ

注「なんという酷い時代!」という意味がこめられているようです。カザフスタンではこの曲によって市民が連帯し、セミパラチンスクの核実験場を閉鎖させた歴史があります。切々と訴えかける曲のパワーが市民を動かしたのです。芸術的に高められた文化的表現の持つ力を感じます。若者たちの発言とこの曲が重なります。

(江田・埼玉)

### ○岡崎航平 (静岡・エバーグリーン藤枝)

僕は高校 2 年生の時からエバーグリーンをやってきた。大学で 2 年間農業を勉強して、今は農業に従事している。ビキニ・第五福竜丸事件について、高知・幡多ゼミナールにならって、地元静岡でも去年から関係者のお話を伺ってきた。

杉村征郎さんは事件当時中学生。自宅の目の前に第五福竜丸が停泊、騒ぎを連日目の当たりにして、自分たちも何かやらなければと思い、原水爆禁止署名を集めた。見崎進さんと池田正穂さんは、第五福竜丸元乗組員。見崎さんの話「入浴した風呂の湯をガイガーカウンターで測ったら針が振り切れた。広島では年寄りや小さな子供から先に死んでいくと聞いて、幼いわが子がいつ死んでしまうかと心配でならなかった。」

池田さんの話「機関場で毎日エンジンを冷やす水で体を洗っていたのがよかったのかもしれない。実家があんこ屋で、お客が買ったあんこを捨てるのを見た。店は倒産した。」ビキニ事件と原発は結びついている。



## ○村山哲文（東京高校生平和ゼミナール）

昨年6月に行った「被災地学習交流ツアー」では、石巻市の水産加工会社「ヤマトミ水産」の千葉社長から「石巻の復興の現状と課題」についてお話を伺いました。千葉さんは、国や東電の稚拙甚だしい対応に強い憤りを示しながら、それでも一人の解雇者も出さずに再建を進めていることに復興への強い自負を語ってくれました。翌日は、石巻、東松島、女川の海沿いの町を巡り、また女川では、原発反対運動を40年間も続けてきた町議会議員の高野さんにお話をお聞きしました。女川原発も震災で外部電源の8割を消失し、福島原発と紙一重だったといえます。その後、宮城県立水産高校の生徒三人と福島の安達高校の生徒一人から、震災当時やその後についてお話を聞き、交流しました。その切々としたリアルな証言は圧倒的で、衝撃を受けました。



今年3月に福島市で開催された「復興のいまと原発事故について学び交流する高校生のつどい」では、福島原発告訴団長の武藤類子さんが、震災と原発事故から3年を迎えた福島の現状をありのまま報告してくれました。その上で自らの環境循環型の暮らし実践も紹介され、生態系や自然への絶対悪としての原発の真実とともに、私たちの暮らしの在り方、「文明」の成り立ちようを含めて見直し、エネルギーはもちろん食やコミュニティそのものの新しい未来、モデルを切り拓け、と僕たちを激励してくれました。その後、各県報告に続いて行われた分散会では、高校生たちが3つのグループに分かれて、武藤さんのお話をもとにしながら意見交流をしました。2日目は、津波被害のあった松川浦で、相馬双葉漁協の漁師の石橋さんからお話を伺いました。その後、浜通り農民連の農産物直売所「野馬土」を訪れ、NPO法人代表理事の三浦さんからお話をお聞きしました。現場で奮闘する生産者さんたちの思いにうたれ、強く勇気と希望をもらいました。

この二回の学習ツアーを通じて、戦争も核兵器も原発も、平和と相容れないものであるという真実は、現場に学び、人に学び、つながる中でより明確なものになりました。その上で、歴史上において人類として問われているこの岐路を、民衆がどう判断し、何を創りだしていくかという今後の対話と行動において、私たち高校生ないし若者はその中核を担っていくべき存在だということがしっかりと五体に刻まれた経験になりました。

## ○コーディネーター 藍原寛子(ジャーナリスト) のまとめ

### 核被災の当事者として、体験と学びの共有を



私は福島で生まれ育ち、福島民友という地元紙に約20年勤め、現在、地元福島市を拠点にジャーナリストをしています。全国各地から大勢の皆様にごうして福島にお越しいただいたことに感謝申し上げます。私も次の世代の皆様と一緒に学び、活動していきたいと、福島の斎藤毅先生や学生と一緒に研究をしており、今年3月には4人の大学生とともにマーシャル諸島に行つてまいりました。

さきほど二上さんを始め、4人の方のご意見を伺って、みなさんがそれぞれに考え、行動していることに感銘を受けました。そして新たな疑問を持ちました。それは、みなさんが調査し、研究している過去の核の被災体験や学びが、2011年3月以降の「福島への教訓」として生かされているのだろうか、ということです。

みなさんは世界中の核被害の状況を学んでこられました。広島、長崎、カザフスタンのセミパラチンスク、核施設やウラン鉱山、そして第五福竜丸を含むビキニ被ばく。歴史の上でも様々な核の被害が起きていますが、その被害はいまだに継続しています。被害を語る人々がいます。それでも、「今、福島で起きていることは、これらの核被災地とは違うのだ」と、世界の核被災地と福島を切り離して語るという言説が流れ始めています。象徴的なのは、「福島原発事故では誰も亡くなっていない」という言い方です。ところが福島

では、長期化する仮設住宅での避難生活で、自殺や病気など、「災害関連死」は1700人を超え、津波や地震の直接死を上回りました。地元福島の視点では「原発事故で誰も亡くなっていない」という物言いは虚構だということが分かります。

では、核問題の不確実性を伴う状況において、福島の人々は何をしたのか。実は、学ぶこと、議論することから始めたのです。震災直後は、小学校や幼稚園で何度も勉強会が開かれ、測定器の使い方、放射能防護の方法について理解を深めました。

先ほど二上さんは、今、苦しんでいる人々がいるという歴史の事実から、「知る事から始めたい」と述べられましたが、それはまさに福島の人々の叫びに通じるものです。

ボラトワさんは、カザフスタンの歌や踊りで人々の想いを表現してくれました。言語や文化を超え、核の被災を歌や踊りで表現し、世代を超えて継承していくことは新しく、意義のある方法だと思いました。岡崎さんの話で最も印象深かったのは、岡崎さん自身が社会人になっても調査や研究を続けていることです。そして自分が得た体験や知識を多くの人に共有しています。調査を通じて、一生涯にわたり、被ばく者が差別や健康被害と闘う厳しさを掘り起こしました。

村山さんが武藤類子さんと会って聞いたことは、東京に住む人へ福島県民から「ライフスタイルを通じて核の問題を考えてみては」という問い掛けだったのではないのでしょうか。福島では夜の9時になれば電車もバスもなくなりませんが、東京は夜中までネオンが輝き、電車も動いている。でもその電気は福島の原発から運ばれたものです。電気の大量生産、大量消費というライフスタイルのままでいいのか。その問題意識を若い人々から発信してほしいと、武藤さんは願っているのではないのでしょうか。余談ですが、武藤さんが暮らす三春町は、福島県内でも自由民権運動が盛んだった地域です。この地域にIAEAの入った施設が建設されることになり、私はこれも、新たな安全神話の構築ではないかと思います。

## 質疑応答

Q 素晴らしい報告を聞きましたが、皆さんのまわりには皆さんのような若者がいっぱいいるのですか？仲間づくりは広がっていますか？

A 二上 一匹オオカミでやっているけど、関心を持っている人は大勢いるので働きかけることは大事だと思う。

岡崎 静岡でもお茶から真っ先に放射性物質が検出された。しかし、忘れたい、もういいだろうという雰囲気を感じる。

村山 悩みの種は人が増えないこと。しかし、まわりの人は知らないだけ。世の中、こうなっている、高校生ができることがたくさんあることを伝えて行けば、分かってくれるはずだと信じている。目を見て伝えていくことが大事だと思う。

Q 新たな安全神話について教えてください。

A コントロール下にあるなどと言う発言もあったが、除染は一部しかできていない。面的除染を見直そうという動きもある。ガラスパッチを子どもたちにもたせようともしている。科学信仰も問題。広島長崎よりも放射線量はずっと少ない、などと海外で発言している。STS会議では、「すべての数字、科学には政治的思惑がある」と指摘している。

Q 高校生平和ゼミナールの今後は？

A 新たなつながりを自分のまわりにどう作るか、日常の中にどう広げるかが問題。

Q セミパラチンスクの被ばく二世、三世の様子は？私は被ばく四世です。

A 目が悪い、おなかの調子がよくないなど、何らかの症状をみんな持っている感じだった。



## おわりに

**村山:** 被爆者聞き取りプロジェクト計画 体験者の話を聞いておくことの大切さ、リレーランナーとして「高校生が心に刻んだ戦争と平和の記録」30人の証言を集めた。

**岡崎:** おとし韓国に行って、広島での被ばく者の話を聞いた。いじめにもあったという。「新しい安全神話」が広がっていると感じる。原発についても、リスクはあるけれども続けていかねば、コストも安いという声があるが、何とかわかってもらわなくては…。周りの人に伝えていきたい。

**シャリアット:** 今日は新しいことをいっぱい学んだ。地球は若い人の手の中にある。これからも福島と広島のことをいっぱい学びたい。

**二上:** 高校生平和ゼミナールの人数は少なくなっても、内容を濃くすれば、数を埋めるだけの交流を測れる。活動で大事なものは、現地に生の話を聞きに行くこと。動いた分だけ成長できる。動き続けることをやめてはいけない。社会人になっても続けていきたい。

## 特別報告

### 高校生災害復興支援ボランティア派遣隊の報告



**日上:** 広島から来た。2013年3月に結成。広島から福島へボランティアを派遣して、今回で7回目。昨日は夜遅くまで交流会した。榎葉町出身の中学生が「建築を学んで早くまちづくりをしたい。福島高専に入って早く勉強したい。榎葉町をもう一度作ることをやりたい。」と目を輝かせて話してくれた。僕は、一生サポートしてこうと心に決めた。

**遠藤:** 福島富岡町出身。高校（サテライト校）3年。広島の平和学習に参加してあらためて平和について考えることの大切さを学べた。原爆の恐ろしさを知っているつもりだったが、碑めぐりや被爆体験聞き取りで深く知ることができた。福島の人に広島のことを伝えたい。福島の人と広島の人と一緒に平和について考えられるといいと思う。教師になりたい。

**桑木:** 仮設住宅を訪問して清掃したり、お好み焼きを作って交流してきた。9月に広島で報告会を開く。12月にはフィリピンから学生を招く。現在、第8次派遣隊を計画中。

## まとめ

### 藍原

核の問題に直面し、その甚大な被害を知るにつれ、私たちは時折、社会から取り残されたような途方もない孤独感を抱くことがあります。しかし、今回、全国高校生平和ゼミナールに参加し、私は改めて「日本各地には核の問題を学び、考え、行動する人々がたくさんいるのだ」と実感することができました。同時に、「決して安全神話を構築する側、加害者の側に回ってはいけない」という思いを強くしました。福島核被災は、まだ続いています。私たちは時代を超え、当事者として生きているのです。ぜひ、今後も連携を深め、共に励まし合いながら学んでいきましょう。



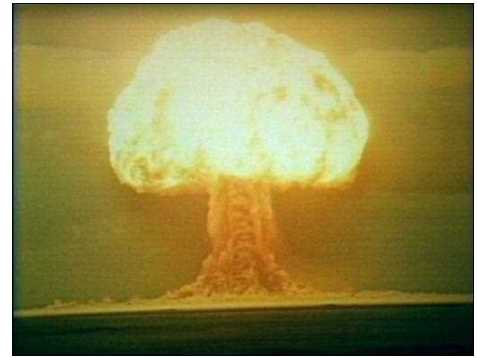
## 広島とセミパラチンスクを結んで

二上真衣（広島・大学生）



1945年8月6日午前8時15分—広島に人類史上初めての原爆投下。一発の原子爆弾によって、一瞬にして約7万人の人が、放射能の急性障害などによりその年の12月までには14万人の人が亡くなりました。

## SEMIPALATINSK



カザフスタンの核実験は原爆が落ちてわずか4年後の1949年8月29日から1991年8月29日に市民の行動による「ネバダ・セミパラチンスク運動」によって核実験が閉鎖されるまで約456回もの核実験が行われ、被曝による影響は3世代、4世代目の子供たちにも見られています。

小学生の頃から、平和教育を受け、高校の時に社会科学部（広島高校生平和ゼミナール）に入部しました。

高校1年生の夏、最初は本当にただの興味本位でカザフスタンのセミパラチンスクを訪れました。私はそこで半永久的に続く、核実験の恐ろしさを学びました。印象に残っているのは、核実験により生みだされてしまった「奇形児の赤ちゃんのホルマリン漬け」です。それを見たとき、「この子を見た両親はどう思ったのか。」真っ先にそのことを思いました。

広島修道大学法学部国際政治学科に入学し、国際交流グループCANVaSやヒロシマ・セミパラチンスク・プロジェクトへの参加を通じてカザフスタンとの様々な交流活動を行いました。

- ・セメイの現地学生との学生会議
- ・アルマティの学生と日本の料理教室
- ・カザフスタン・広島・福島の学生との交流会

セミパラチンスクを訪れるといつも本当に大事にすべきものは何か、とういことに気付かされます。セミパラチンスクの人々は、健康であることの差晴らしさを知っています。彼らの平均寿命は短く、健康そうに見えても何らかの病気を抱えている人が多いのです。

また、カザフスタンは日本ではとても認知度が低い国の一つですが、とても親日的な国です。福島原発事故のあった2011年にカザフスタンを訪れた際、多くの人が福島の人々を心配していました。しかし、そんなカザフスタンですが現在高度経済成長期を迎えており、慢性的な電力不足に悩まされ、2020年までに原子力発電所を作る計画が進められています。日本とカザフスタンは原発導入に関する覚書を結び連携を図り、日本の技術を輸出させようとしています。カザフスタン国内では健康被害がでるのではないかと危惧する声も聞かれている。

もう二度とカザフスタンの人々が放射能の被害にあわないために私達にできることは何か。また、多少不便でもカザフスタンの人々のように心豊かに暮らすためにはどうしたらいいか。そんなことを考えながらカザフスタンとの交流活動を続けています。



## 地球と世界の未来は、私たちの手の中に

ボラトワ・シャリアット（カザフスタンから広島の高校に留学）

みなさん、こんにちは。私は、ボラトワ・シャリアットと申します。1998年5月10日にカザフスタンのセメイで生まれました。16歳です。

今年の4月から広島山陽女学園で勉強しています。来年の3月まで、1年間、山陽女学園で勉強します。学校では、茶道、書道、ESSのクラブに入っています。友だちがたくさんできました。楽しい学校生活です。

今年の8月5日の朝、私は広島平和公園で、原子爆弾で被爆したおばあさんの話を聞きました。このおばあさんは、日本で暮らしている韓国人です。爆心地から1.9キロメートルの電車の中で被爆しました。ものすごい光と音。そして大きな火のかたまりが電車を包みこみました。頭が化膿してべとべとになりました。「私は在日韓国人として、いじめにあわなかったとはいわないが、やさしさや愛情もたくさんあった」。彼女はそう言いました。

昼には、韓国から来たおじいさんの話を聞きました。髪の毛が抜けました。韓国に戻ってからも病気がちでした。原爆のせいでたいへん苦労しました。

夕方には、日本に住んでいる韓国人のおじいさんの話を聞きました。彼はひどいヤケドをしました。皮膚は焼け、薬をつけるのが痛かった。ヤケドの傷が痛くて泣きました。

この日、私は、3人の韓国人の話を聞きました。日本人だけでなく、多くの外国人が被爆したことを知りました。

1945年8月6日の広島で何が起きたか。それから70年近くの間、広島の人たちは、どのようなことを考え、思って、生きて来たのか。それだけではなく、韓国人や多くの外国人は、なぜ被爆したのか。どのように被爆し、死に、生きて来たのか。それを知りたいと思います。

2011年3月11日の東日本大震災と福島原発事故についても勉強したいと思います。広島も福島も放射能被害、核被害を受けたという点では同じです。そして、私の街、セメイも大きな核被害を受けたのです。

私の将来の夢は医者になることです。私が住んでいるセメイの近くには、ポリゴンと呼ばれるセミパラチンスク核実験場があります。その核実験の影響で病気になる人が多いのです。セミパラチンスクでは1949年から1989年までの40年間に、450回以上の核実験がおこなわれ、百数十万人が被曝しました。セミパラチンスクの核実験場が閉鎖されたのは1991年です。私が生まれる前のこと、今から20年以上も前のことですが、その影響は今も続いています。

一年前に、私はセメイ医学大学にある核実験の被害者の博物館へ行きました。放射線は子どもたちに障害をもたらしました。頭がふたつある子ども、こぶのある子ども、ひとつ目の子どもなどが、ホルマリンづけのビンの中にいました。その時、過去の核実験の間違い、恐怖を、私は自覚しました。核実験があった時代の若い世代の人たちは、免疫が弱くて、病気になりやすいです。そして、子どもを産むことが出来ない女性の数が増えています。子どもは、いつもニコニコと笑ったり、喜んだり、しあわせであってほしいと思います。過去の間違いのせいで、病気と苦悩の中にいる子どもたちを見ると、心が痛くなります。私は医者になって、この子どもたちを救いたいと思います。

私は、広島でたくさん勉強して、大切なことを学びたいと思います。福島でも大切なことをいっぱい学びます。間違いを繰り返してはいけません。核も戦争もない、平和な世界をめざして、手をつなぎましょう。地球と世界の未来は、私たちの手の中にあります。ありがとうございました。

## 静岡・エバーグリーン藤枝 活動報告 第五福竜丸元乗組員の聞き取り

岡崎航平（静岡・勤労青年）

2003年の9・11以後、「平和をつくるために地元で何かできないか」と立ちあげた「エバーグリーン藤枝」の活動は2014年で10年目を迎えました。静岡県志太榛原地区の教員、市民、高校生、大学生が混ざって実行委員会を結成し、これまでに10回の写真展・講演会を行ってきました。「主権者は主催者から」を合言葉に、高校生や大学生の若者たちが中心になって行い、平和や人権について、地域に発信し続けてきました。2011年の第二回焼津平和賞を受賞した高知県の幡多ゼミナールとの交流が始まり、遅ればせながら私たちも「幡多ゼミナールにつづけ！！」と、第五福竜丸と放射線被ばくについて調査を開始することにしました。

### 2013年9月第五福竜丸乗組員の見崎進さんのお話会

（当時27歳）「俺と久保山愛吉さんだけが結婚して子どもがいた。独身の衆は結婚できないじゃないかと、かわいそうだった。アメリカから150万円くらい受け取ってから『あの船に乗っていれば金もらえたのに』『あんたちゃ、金をもらえてええっけねえ。』などと言われた。けんかをしてもしようがないから『ああ、ええっけよ』と言っておいた。事件以後は、体が心配で、迷惑かけるといけないと思って船に乗る仕事はやめた。いつ病気になるか分からないという不安はあった。仕事のことが一番心配だった。その後豆腐屋を始めた。『原爆豆腐』と買ってくれた。俺が入院中、家族は近所の人から『うつる』と言われて避けられた。病院では久保山さんの隣のベッドで、久保山さんがどんどん容体が悪くなっていくのを見ていた。亡くなってからは、歳の順でもベッドの順でも次に死ぬのは俺だと考えていた。」



### 2013年11月池田正穂さんのお話会



「とってきた魚は、いつものように近所の人に配ったりした。うちの犬に、マグロの皮を煮て食べさせたら2、3日後に死んでしまったが、おかしいとは思わなかった。いま思えば、放射能にやられたのだろう。」「1年2か月入院していた。退院してからもどってみると、実家はあんこ屋さんだったが、買った人が第五福竜丸の乗組員のうちのものだと言って川に捨てているのを見てしまった。店はずぶれた。」

「私も当時は22歳。彼女がほしかった。入院中見たテレビで若い女性が福竜丸の人と結婚するのはいやだと言われているの

を見て、4か月後に京都へ行くことにした。」

2014年度のエバーグリーン講演会では、伊東英朗監督による『放射線をあびたX年後』制作から見てきたことを開催しました。伊東さんは『第五福竜丸事件』という言葉を使うと、1946年から1962年まで122回も行われた原水爆実験を矮小化する。」といました。非常に重要なお話で、アメリカ、日本の原子力政策に関することなど多岐にわたるものでした。

今年7月には、当時焼津市職員で、焼津漁港でせり売りをしていた北原茂治さんのお話を聞きました。第五福竜丸の乗組員だけが補償金をもらったことに対する焼津市民のやっかみ、妬みについてリアルに語ってくれました。原発事故と第五福竜丸事件の共通点の多さと、因果関係の深さに驚かされました。

今回の福島の旅では皆で意見を交換し、交流を深めたいと思います。私も今までエバーグリーンで活動した中で、培ったものを学生たちにアドバイスできたら嬉しいです。